

ゲスト対談：奄美社会からの声

雑誌名	奄美ニューズレター
巻	30
ページ	24-40
別言語のタイトル	Panel Discussion : Community Voices from Amami
URL	http://hdl.handle.net/10232/17866

■特集：シンポジウム「世界自然遺産と持続可能な発展」

ゲスト対談：奄美社会からの声

パネラー：阿部 慎太郎（野生生物保護センター）
浜田 太（写真家）
藺 博明（環境ネットワーク奄美代表）
前田 芳之（動植物の観察専門家）
花井 恒三（奄美市企画部長）
司 会：根建 心具（鹿児島大学教授・教育センター長）

「18年前、南さんが『奄美の山は・・・野生生物がいなくなってしまった』とおっしゃるのを聞いて私は驚きました。（今に比べれば）野生生物が山ほどいた時代にですよ。」

「地域否定、郷土否定、方言廃止運動という嵐の中で育って・・・、（大切なのは）地域に根ざした人づくり、奄美の未来を担う人づくり・・・」

「先人たちの自然との一体感、こういうものは、地球規模で環境問題が深刻な政治課題になっている今、世界の人々に堂々と発信」

「大規模に破壊された奄美の自然の中で、生き物たちは何とか蘇ろうと必死で頑張っている・・・自然に負荷の掛からないやり方を」

「産業のシンポジウムと生涯学習のシンポジウムと（世界自然）遺産のシンポジウムの3つとも（参加者の層が別々で、それぞれの集會に）、同じ顔ぶれだけが来て語るというのは問題」

奄美の皆様の声には迫力がありました。フロアからも数多くの意見や提言が相次ぎ、200名は熱気に包まれました。生き抜くために、持続可能な発展を求めて、世界への発信の時期がそこまで来ていると感じる。



(総合司会) パネラーの方が着席されましたのでご紹介いたします。本日、第1部パネル討論「奄美社会からの声」の司会、根建心具、鹿児島大学教育センター長です。

(根建) こんにちは。こんな大役を引き受けて奄美にお邪魔するのは初めてです。私は大学で地下資源がどうしてできたかということの研究してきました。地球を壊して人間が発展するということの矛盾をずっと抱えてきました。今回、「奄美の『島』コスモス創出事業」に参加でき光栄に思っています。このプ



ロジェクトの魅力はいろいろの専門家が集まって、同じテーマを考える点です。きっと目から鱗が落ちるような新しい発想に出会えると期待しています。

本日のパネル討論では、奄美の皆様の声の声を直接お聞きしたいと思います。

最初にパネラーのお考えと提案をお聞きしたうえで、フロアの皆様方にご参加いただきたいと考えております。お手元のチラシにあります順でご意見を伺います。最初は環境省の自然保護官で奄美野生生物保護センターの阿部慎太郎さんです。

【野生生物と人間との共存のあり方】

(阿部) こんにちは。野生生物保護センターの阿部といいます。パネラーの中で一番の若造です。皆さんの前で少し緊張もしていますが、簡単に自己紹介と、



思っていることをお話しさせていただきたいと思います。

私は大学のときに東京にいまして、西多摩の檜原村というところで野生ニホンザルの生態調査をサークルでやっていたのです。テントを持って山に入って、1日山を歩いてサル群れを追跡しては、夜テントに戻るということを繰り返していました。

その地域では、サルが農作物を荒らす猿害が結構ひどい状態でした。農家の人たちは、畑に出てくるサルの目撃情報を結構持っているの、聞き取りなどをしていました。

農家の人と話すと面白い話も出てくるんですが、サルの話になると毛嫌いして「もうあんなサルなんて死んでしまえばいい」という話になる。自分はそのニホンザルが大好きでそれを知りたくて追いかけているのに、地元の人があんなやつは死んでしまえというのは何かおかしいと思っていました。どうかならないのだろうかということを感じながら学生時代を過ごし、卒業してから奄美に来ました。

奄美に来るのも偶然だったんですが、奄美に来て人間と野生生物の軋轢みたいなものがあるのだったら、何とかしないとイケない。それはいろいろな形でどこにでもあるものだから、別にサルがいなくてもよかったわけです。最初は民間にいましたので、何ができるかはよく分からないまま、島でみんなと一緒に暮らして、野生生物のことを調査し、野生生物のことを考えられるようになったらいいなと思っていました。

私が奄美に来たのが昭和63年ですから現在19年目に入ります。6~7年前に環境省に転職をしましたので、その前のNGOとは立場が違っているんですが、奄美の自然のすごさを島の人と分かち合いたい、何とかして島を野生生物たちが安心して住める島にしていきたいという気持ちは、今でもあるつもりです。環境省で仕事をするようになって動き方

はずいぶん違う面もありますが、人間と野生生物のよりよい共存のありかたを模索する中で、世界自然遺産への登録などということもきちんと考えて、前向きに取り組んでいかなければいけない段階に、ようやくきているという気はしています。

〔南竹一郎さんの奄美の森〕

18～19年前の最初のころ、奄美に来たときに知り合った中に南竹一郎さんという方がいます。ハブ捕りの仕事で生計を立てていた人で、ハブ捕りだけで何人ものお子さんの学校を卒業させた人です。南さんはもう亡くなって久しいのですが、私にとっては奄美の山の師匠として、まだ奄美の山のことを知らないころから、時々ハブ捕りに一緒に連れていってもらいました。その南さんが「奄美の山は変わってしまった、野生生物がいなくなってしまった」と、18年前にしきりに言っていました。初めて来た私にとって野生生物が山ほどいたのに、にもかかわらずです。私は驚きました。こんなにすごい山と野生生物は南さんが知っている奄美の森とは全然違う。南さんの知る森の状況は、どんなにすごかったんだろうという想いがずっとありました。けれども奄美に住めば住むほど、私も感じてしまう、さらなる衰退というか、野生生物のいなくなってしまう状況を、ここ19年の間、目の当たりにしてきたわけです。

何とかしなければと思いながら、5年、10年たつうちに、どんどんどんどん野生生物がいなくなっています。この状況の中で本当に世界遺産としてふさわしいのだろうか、島に住んでいる人たちは本当に野生生物のことを考えてくれるのだろうか、不安になるときもあります。先ほど学長さんもおっしゃいましたが、たぶん世界遺産登録というのは経過点にすぎないと思います。何とか島の人たちみんなで、この島を南さんが知っている島に戻したいと思います。

ただ一方で生活もあるわけですので、その生活との兼ね合いをどうしていくかということも今日のお話でしょうし、野生生物のために、島で生活する人の今まで向いてきた方向を少し変える努力をしていかなければいけないのかなど、今は思っています。

（根建） 奄美の生態系の急速な変化についてのお話し、ありがとうございました。引き続きまして浜田太さんです。アマミノクロウサギの撮影は非常に有名ですが、それ以外にも精力的に出版活動をなさっておられます。

【アマミノクロウサギとの出会い——森の奥の現場から】

（浜田） 皆様、こんにちは。今、阿部さんがお話をしている間に頭の中でちゃんと整理しなければと思いながら、うまく整理できていません。



今、紹介がありましたように、私は20年間、アマミノクロウサギの生態を追っています。こういう形で皆さんの前に立たせていただいているのは、ある意味でこのクロウサギが私を育ててくれたことと思っています。

結論から申し上げますと、20年間やってきた中で思うことは、この奄美の自然は資源で、生かすも殺すも人次第、そういうふうには私は結論付けています。やはり人が育たないと何も始まらない。復帰して40年、50年の過去を振り返ってみて、我々はいったい何をやってきたのだろうかということを感じます。私は小学校から高校までこの奄美で育って、都会で大学を出て出版社に勤めて、また奄美

に帰ったわけですが、振り返りますと故郷の自然について何も知らずに外に出ていました。

奄美に帰ってしばらくして、クロウサギとの出会いがあり、奄美の森の素晴らしさとも出会いました。いまや世界自然遺産候補地にまでなりましたが、20年前、そういうことを夢にも思いませんでした。ただの素人ですが、誰も研究していなかったため、奄美の自然の象徴のウサギの写真を撮り始めました。手探りで何も分からずただ林道を走るという形で、毎晩毎晩、森の中をさまよいはじめました。

「ウガシャンムンシ ムンヌ カマリン ニャ (そんなもので飯が食えるのか)」と、周りから言われたことは何度もありましたが、こつこつこつこつやってきて20年という歳月が経ち、今、ようやくこういう形で皆さんにお話ができるまでになりました。ある意味でアマミノクロウサギにそういう人間に育てていただいたことになるかと思えます。

私は今日、森の奥の現場から皆さんにお話ができればという思いでパネラーをお受けいたしました。皆さんにこのプリントを配ってもらいましたが、これをお読みいただければ、だいたいの流れはつかめるのではないかと思います。私自身、20年前からすれば奄美の自然に対する考え方が、だいぶいい方向に変わってきていると思いますが、まだまだ足りないとも思えます。

私は53歳ですが、過去を振り返って何がよくて何が悪かったのか、そういうことをもう1回、考え直す時期にきていると思います。

〔地域を肯定する教育の必要性〕

私の小学校のときには、自然教育などはほとんどなく、ただ野山をかけずり回って体で覚えたということがあります。先程、生かすも殺すも人次第と申し上げましたが、小学校のときの方言廃止運動や、地域否定の教育を受けた人間に、郷土を愛する心などというの

は芽生えないと思うのです。

そういう地域否定、郷土否定、方言廃止運動という嵐の中で育ってきて、早く島から出ていきたい、こんな島に二度と帰りたくないと思って出ていったわけです。やはり出ていくと自分の根っこ、足元がない。本当に俺はどうやって生きればいいのかと都会で悩んでしまって、やはり島に帰ろうと思い実行しました。それでもなかなか自分の生きる道が見つからずにいました。

よくする話ですが、ある旅人に「奄美はどこへ行ったら面白いですか」と聞かれまして、「奄美なんか面白いところはありますか」と答えてしまいました。そうしたらその旅人に、「地元の人がこれじゃなあ」と吐き捨てるように言われてしまいました。その言葉を聞いたときに恥ずかしくて、何でこんな素晴らしいところがありますよと答えられなかったのだろうか。振り返ってみると、自分は何も知らないでそこに生きていることに気付かされて、自分の今までは何をやってきたのだろうかと思いました。

そして何か取り掛かるテーマはないかなと思って、日々、フィールドワークをしている中で、アマミノクロウサギと出会ったわけです。そのころアマミノクロウサギを研究している研究者は誰もいませんでした。ましてや森に入って生態を追いかけるなどという人はいない。大和村の小学校で、飼っているウサギの生態を研究している先生がいらしたようですが、山に入ってやっている方はいらっしやなくて、本当に手探りでした。

〔奄美の未来を担う人づくり——多くの分野の連携〕

私はクロウサギの子育ての様子などを撮影して、世界で初めて子育ての生態を解明しました。本当はアマチュアの我々ではなく、鹿大の先生や学生などがもっと目を向けるべきではないかと、以前どなたかの先生に飲みな

がら、くってかかったこともありました。でも、我々自身がもっともっと奄美の貴重さをきちんと自覚しなければいけません。これからは世界自然遺産候補になると、観光とかそういうところばかり目を向けますけれども、やはり自分たちに縛りをかけて、これからどうやっていくかということに知恵を絞っていかないといけない時期だと思います。

特効薬というのはなかなかないと思います。特効薬はないけれども、いろいろな人たちが知恵を絞って、経済とも両立させていかなければいけないという目の前の問題を解決していくために、地域に根ざした人づくり、奄美の未来を担う人づくりということをやっているかといけない時期にきていると、私は思います。

そういう意味で教育とかいろいろな分野との連携というものが、これからはもっともっと必要になってくるのではないかと思います。話が散漫になっていますけど、このレジュメを読んでいただければお分かり頂けると思います。

先程、小野寺先生のご紹介がありました。小野寺先生が3年前におみえになったときに、なぜ奄美が世界自然遺産候補地として選ばれたかというお話を、サンプラザホテルで聞くことができました。それを基にこれを書きましたが、そのときのことが非常に印象に残っております。

(根建) ありがとうございます。ほとぼる郷土愛をいただきました。次は自然保護のために長年、奔走してこられている、環境ネットワーク奄美代表の蘭博明さんです。

【シマは変わった——環境破壊】

(蘭) 蘭です。わらべ歌をぜひ皆さんに紹介したいという気持ちで、大急ぎでレジュメを準備しました。時間を考えて書きましたが、これのほんの一部しか申し上げることはでき

ません。



かれこれ20年ぐらい前になります。

鹿児島から転勤で名瀬に来ました。最初勤務した市内の中学校に出戻りのような形で帰って

きました。早朝、船を降りるとき、かつての教え子たちがタラップの下にたくさん立っておりましたが、開口一番、1人の教え子が、「先生、シマは変わったよ」と言いました。その当時、私が転勤する学校は荒れているということで新聞をにぎわしていた時期でした。鹿児島から来るときも「大変なところに行きますね」と言われました。それで教え子たちは学校が荒れていることを言っているのだろうと思っていました。何日か後にまた話題になって、「先生、あちこち行って見てごらん」と言われました。

シマは変わったとは何かといいますと、海岸がコンクリートの護岸堤で固められアダンが次々と伐採されている、沖には消波ブロックがあちこちに置かれた、そのことだったので。

それまで私は奄美の環境問題についてあまり関心を持っておりませんでしたし、その取り組みをやったこともありませんでした。ところが教え子のこの一言で意識して回ってみますと、それはそれは、すさまじいものでした。そこで加計呂麻から請島から喜界、徳之島、永良部、与論まで、あちこち走り回って奄振事業の基盤整備の状況はどんなだろうかと、自分の目でまず確かめてみようと思って動きだし、私の環境問題へのスタートになりました。

私は文字通り教え子に教えられて、今の自分があるのだと思います。私が授業で語って

きたことは、「人間は誰でも生まれ育った場所から逃れることはできない。意識する、しないにかかわらず、何らかの影響を受けている。君たちは奄美で生まれ育った子供たちだ。シマを忘れるな、シマを隠すような人間になるなよ」ということでした。今もそうですが、あのころはほとんどが、本土に出ていった時代でしたから。

〔奄振事業と自然のダメージ——自然の権利訴訟など〕

「誇りを持って奄美のことを語れる子になってくれ」と言いましたが、最初は、歴史、文化を中心にしたイメージからでした。それがあの教え子の出迎えのときの言葉に、つながっていると思っています。そこでまず海辺を守っていこうということで、「奄美の海辺を守る会」をつくって、取り組んできました。

取り組んだものは多くを守ることができましたけれども、それでも公共の奄振事業による自然へのダメージはずっと続いてきております。そこで、皆さんご承知だろうと思いますが、奄美の野生生物を原告にした奄美自然の権利訴訟というものを起こしました。裁判の結果がどうなるかは別にして、誰かが考えていること、見ていることを主張し行動しない限り、奄美はだめになっていくという危機感から、権利訴訟を起こしました。

そういう営みが奄美の環境問題を世間に紹介する機会になれば、そして守っていく手だてがつけられるならばと考え、ああいう訴訟を起こしたといういきさつがあります。レジュメにも書いてありますけれども、あの当時、多くの人々、特に行政関係者の人々から、開発推進の集会の中では「自然で飯が食えるか」と、「ある一部の人だけが反対するばかりだ」といった声を、たっぷりと聞かされてきました。

ところが、たとえ非難中傷を浴びようとも、今、思い切って言わなければ奄美の将来はないという危機感の中から言ってきたことは無

駄ではなかったと、この20年の歩みの中で痛感しております。抽象的な言い方でとどめますけれども、あのとき、とんでもないやつが、とんでもないことを言うというような調子でやつつけられていました。しかしながら今、世の中の流れは私たちが主張した方向に流れてきていることを実感しているところです。

「宝の島」を「利権の島」にしてはならないという主張を、このレジュメに書いてあります。これは私が一番大事にしていることですが、時間がないので省略します。

奄美の基盤整備事業で一番問題なのは、むだな工事、する必要がない事業をやっていることです。必要であってもそれが過剰で、大きな負荷を自然環境に与えてしまうことを、私は問題にしているのです。それを海まで含めて考え続けてきております。海を取り組んでいるときに、川や森を守らないとどうにもならないということで、森に目が向きました。その活動の中で、陸の動植物に詳しい皆さん方が参加するという経緯をたどってきております。

復帰後の奄美は、奄振事業とともに歩んできたと言っても過言ではないと思っています。その中で奄美の自然環境が大きく変わっていったのと同じく、それ以上に私が悲しい思いをしていますのは、奄美の先祖たちが、自然とどうかかわってきたかがまったく顧みられなくなってきていることです。無視されているのか初めから知らないのかは分かりませんが、顧みられなくなったことに一番胸を痛めております。

〔わらべ歌と自然との関わり方〕

人間は自然に生かされているということで、このわらべ歌を1つの例としてレジュメに出しておきました。この『サギヤサギヤ』のわらべ歌をぜひ読んでいただきたいと思います。渡り鳥としてやってくるサギ、これに問いかけるような形で母親が我が子に語る調子の歌

になっています。

メロディーは大変明るいのですが、当時の生活そのもの、そして我が子に対する愛情が自然と一体となったぬくもりというものをこの歌に感じます。そしてシマは苦しい歴史をたどってきましたけど、人間のぬくもり、お互いの支えあいの中で、自然をも大事にしてきました。「水や山おかげ、人や世間のおかげ」という先人のことば、雰囲気思い起こせるとしています。

私は先人たちの自然に対するかかわり方、一体感、こういうものは、地球規模で環境問題が深刻な政治課題になっている今、世界の人々に堂々と発信していい内容ではないかと思っています。本気でそんな気持ちになっているところです。後から意見交換の場で発言の機会があったら追加したいと思います。

(根建) ありがとうございます。感動すべき信念を語っていただきました。続きまして前田芳之さん。ソテツの研究をはじめ、動植物の観察専門家として、瀬戸内から来ていただきました。

【移住の動機——ダチュラの花の香り】

(前田) こんばんは。私もここへのIターン組です。自分自身が育ったのは大阪の下町で、幼稚園から高校まで、通学路というのは、それこそ全部、アスファルトやコンクリートの舗装だったのです。小さいころから周りに自然の好きな人が多かったので、とにかく休



みの日などに山へ行くのが唯一の楽しみで育ちました。どうしても都会の中の自然というのは奄美の様に本当の自然に囲まれたところとは違います。その当時テレビなどはなく、本を通して常に本当の自然にあこがれていました。

大学時代、山岳部にいましたが、たまたまけがをして夏の合宿に行けなくなり、奄美出身の友人に誘われましてここへ来たのが最初です。それは今から40年ぐらい前です。初めて来たこの島の印象は、夕方に川べりで咲いていたダチュラの花の香りです。それこそ初めて見た花で、ものすごく濃厚なおいを感じたのです。自分が何となく想像していた南の国の薫りです。そのときのインパクトはものすごく強く、とにかくしびれました。それから毎年、機会があれば来るようになりました。卒業後、植物関連の会社に勤めていましたが、生産者が作ったものを店頭で運んで、それを売るだけのことだんだん耐えられなくなり、それでは自分で作ってやろうということになりました。

ちょうど石油ショックの時だったので、もう奄美しかないとかなり短絡的な考えで、とにかく奄美へ奄美へと、あまり準備期間もあらずにここへ来ました。それが1972年でした。たぶんIターンのはしりぐらいだと思います。もともと昆虫以外にも、鑑賞用植物ではなく野生の植物や動物といったものが非常に好きだったんです。

それでここへ来まして仕事もやり始め、楽しかったのです。とにかく見るもの、聞くもの、触るものが新鮮で、毎日毎日ものすごくうれしかったです。それでも毎日そうして積み重ねているうちに、どうも山の裸になり具合が速いと感じるようになりました。ちょうど最後の大伐採が行われていたときなのですが、こんなはずじゃないというくらいに、山が空っぽになっていくのです。

〔蘇ろうとする自然〕

今、内地から来られる方が感動される奄美の山は、おおむね30年から40年生ぐらいの森林ばかりです。それ以前にあった本当の奄美の林は、どこにあるのだろうかというぐらい、原生林は今ありません。

それだけ痛められたのに、やはり自然の回復力というのは素晴らしいものです。ちゃんと形だけは返ってきているのです。

ところが詳しく調べてみると、骨組みはおおむね返ってきているけれども、本来あるべきはずのメンバーの数がずいぶん少ない。これは具合が悪いのではないかということ、ここ10年ぐらい非常に強く感じています。

自然遺産登録をするに当たっても、その前に我々がしなければいけないことは、本当の原生林はどんなものがあつたのかという検証や、どうしたら残せるだろうか、その辺から詰めていかないとだめじゃないかと、私自身は考えています。そのための研究が非常に手薄のような気がするのです。

奄美というのはこれだけ大きな島なのに、大学がない。それは仕方ないとしても鹿児島大学の出先機関ぐらいはあってもいいのではないかと思います。あるいは、フィールドワーク専門の方が来られて、体系的に指導されるようなシステムになったら、もう少し早く失われた生物や、今後どうしたらいいかということが分かっていくのではないかと日夜考えています。

しかし、私の夢はなかなか進まないだろうから、取りあえず自分のできることでサンプルなり何なりを、後世のために残して置こうとやっています。

〔自然に負荷を掛けない知恵〕

経済林の話でいえば、山を切らなきゃ食べないじゃないかという話もあります。ですが、先程誰かおっしゃっていましたように、自然に負荷の掛からないやり方を考える頭を我々

は持つべきであると思います。ただやみくもに経済性、利便性だけで進んできた結果、これだけのものを壊してきたわけです。大規模に破壊された奄美の自然の中で、生き物たちは何とか蘇ろうと必死で頑張っているところです。けれども最近また新たに、それを壊すようなことをいろいろとし始めているので非常に危惧しています。

(根建) ありがとうございます。前田さんはぼくとつと話されましたが、大変研究熱心で、鹿児島大学にも注文をつけていただきました。

最後になりましたが、奄美市企画部長の花井恒三さんを紹介します。最初に私の方から申し上げたいのは、私たちのプロジェクトの願いを聞いていただいたお礼です。花井さんがいらっしやらなければ、このパネル討論は実現できなかったでしょう。

【奄美本来のふさわしい姿——名大関十横綱をめざす】

(花井) ご苦労さまです。私が世界自然遺産を語るときにいつもする2つの話をして、その後、行政が今まで何をしてきたか、さらに行政はどんな課題を持っているかをお話したいと思います。

世界自然遺産を語るときに申し上げたい1つは、大相撲の世界に奄美の世界自然遺産をたとえることです。奄美は大相撲でいえば、

去年亡くなられた名大関貴乃花がふさわしいと思います。横綱にはなれないけれども、世界遺産という登録にはな



れないけれども、どんな世界遺産の島よりも抜群な人気を持っている。これが奄美の本来のふさわしい姿ではないかと言っているんです。その上で横綱を目指そうというわけです。横綱にはいろいろなチェック項目があります。1つ欠けていても大関です。でも大関貴乃花は横綱より人気があった。いかにも奄美らしいと思うのですが、奄美はそれでも横綱を目指しますから、横綱でもあり大関貴乃花の人気もあるという島が、これから奄美が目指す方向かなと思います。

なぜそういう話をするかということ、冒頭、永田学長がおっしゃいましたけれども、西表島やヤンバル、屋久島に私も行ってきました。テレビでは小笠原、白神、知床を見ました。いずれも人が入れない地域を必ず持っています。それに全体としても人が少ない。私は自然遺産になるのは当たり前だと思っています。奄美はこれだけ人がいて、それでもなおこれだけの価値を持って世界遺産になろうとするわけですから、これは名大関貴乃花と横綱とを併せ持つ地域だと思うのです。

〔不断の努力の上の屋久島遺産登録〕

もう1つは、屋久島の世界自然遺産十周年に立ち合うことができた時の話です。屋久島の方々は、どの人に会っても言います。「屋久島は世界遺産を求めてなったのではありません。自分たちが不断に努力した結果、世界遺産の方が転がり込んできた」というのです。この生き方を奄美もして世界遺産が転がり込んでくる、そういう生き方を私たちはしていかなければいけないなと思います。

〔行政の取り組み—野生動物センターの誘致〕

さて、それでは今まで行政は何をしてきたのだという話です。最初に取り組んだのは阿部先生がいらっしゃる野生生物保護センターの誘致です。私も行きましたけれども環境省を訪ね、日本全国で7番目に奄美に持ってく

るということにこぎ着けました。その後、世界自然遺産を視野に入れて、「奄美群島自然共生プラン」を作り上げ、今、その推進体制を構築しているわけです。

〔重要生態系調査—世界自然遺産〕

この3年間。重要生態系調査が行われました。これは完全に世界自然遺産を視野に入れた調査です。ゾーニング、それから奄美の価値を含めて学者先生等々を中心に、今日のパネラーの方々にも全部加わっていただきました。生態系調査が終わって、いよいよその次のステップに入ることになりましたが、それが本年度からの国立公園化と地元の地域推進体制です。

この間、新聞やテレビで報道されましたが、小笠原の話に加えて、奄美の完全な保護地域と活用する地域のゾーニング、これらが一緒に走りだすという形で環境省の予算その他も、今煮詰まっているところです。先程、奄振計画（奄美群島振興開発計画）の話もありましたが、奄振51年目から55年目までの5年間の今、その計画に、世界自然遺産を目指して頑張るという意思表示を盛り込んで進めています。

一連の活動の中でラムサール条約はうまくいきませんでした。住用のマングローブの湿地帯をラムサールという話もありましたけれども、こちらの方はうまくいかなかったという経緯もございます。

〔行政の課題—10項目〕

これからの行政にどんな課題があるのだろうか、私は切りよく10項目にまとめて申し上げたいと思います。

1つは奄美群島全体を奄振計画の中で位置付けました。私たち市町村は、まだ環境政策の中の一分野でとどめております。来年、奄美市の総合計画を作りますが、この世界遺産をきちんとこの総合計画の重要な柱に入れる

という作業を、私たち12の市町村のそれぞれが、世界遺産に向かって、総合計画の組み立てをしていかなければいけないということです。

2つ目はこの世界自然遺産を琉球諸島としてつくり上げるということになっていながら、沖縄との話がなかなか進みません。ヤンバルや慶良間諸島や西表島へ行って個人的にお話をすると、頑張ろうという話になるのですが、体系立ってはうまくいっていません。沖縄とどう連携するかということが2つ目の課題です。

3つ目は鹿児島大学との連携です。先程もお話がありましたが、これまでの鹿児島大学の蓄積に加えて、屋久島の世界遺産を構築、組み立てられた環境省の小野寺さんが、今度鹿大の特任教授としていらっしゃいました。鹿児島大学と奄美市は包括連携協定を結んでいますので、鹿大との関係がますます近くなったことです。

4つ目は全国に奄美の世界自然遺産を応援しようという方々が、たくさんいらっしゃいます。私もいろいろな方とお付き合いしていますが、これらの人には2つのタイプがありまして、奄美の自然の保全に連携しようというタイプと、活用しようというタイプです。これらの方々とどう接点を持っていくかというのが大きな課題です。

5つ目は、国が自然再生事業というものをつくりましたが、奄美はまだ一つも行っていないことです。ボリュームが小さいとかいろいろな問題があると思いますが、この再生事業について地元でいろいろな議論をしており、載せるタマをつくってみたいと思うことです。

6つ目は公共工事です。50年間の公共工事やこれからのことなど先程も出ましたが、世界自然遺産の島というものを常に念頭に置いた社会資本整備です。現在技術力もかなり向上しましたので、常に世界自然遺産の島にとってふさわしい投資の仕方と公共工事の在

り方ということ念頭におく必要があると思います。

7つ目は奄美ミュージアムです。奄美ミュージアムは奄美の自然を保全して、それを活用するということですが、その奄美ミュージアム構想の一番大きな太い宝にこの世界自然遺産を位置付けて、私たちは取り組んでいくことです。

8つ目は安倍内閣の「美しい日本」関連の事業です。これは、新年度からあらゆる省に入ってきます。これに奄美がどう向き合うかというのは、今後、国との関係で非常に大きなテーマになってくる。この「美しい日本」に対する奄美の対峙の仕方というテーマと、私たちは取り組まなければいけないと思います。

9点目が地元の推進体制です。今はまったく動いていません。私たちの限られたメンバーだけがいつも限られた話題について語るという状態です。本来ですと、普段から全体で話し合う場を持たなければいけないのですが、何かあったときだけ集まっています。

この1週間に大会が3つありました。生涯学習大会、クロマグロの大会、そして今日の世界自然遺産のシンポジウムです。集まる人がみんな違います。産業のシンポジウムと生涯学習のシンポジウムと遺産のシンポジウムの3つともに、同じ顔ぶれだけが来て語るというのは問題で、私たち行政も頑張っていかなければいけないと思います。

〔自然遺産と文化遺産の複合遺産を目指したらどうか〕

最後の10点目は私のモチーフです。自然遺産と文化遺産の複合遺産を目指すというのが奄美に最もふさわしいだろうと、ずっと主張しています。残念ながらユネスコの文化遺産というのは有形遺産が中心だそうです。ところが世界にはユネスコとは別のシャーマニズムのように無形文化の遺産というものがあります。奄美が、無形文化の遺産と自然遺産

との両方併せ持つ遺産づくりにしていけたら、これまで大島紬が全国ブランドになったみたいに、今度は世界遺産の分野で、奄美が世界ブランドになっていく道なのだろうと思っております。

(根建) ありがとうございます。これで一応パネラーのご意見を伺いました。阿部さんからは野生生物の減少をご指摘いただきました。我々の生活の考え方を換え野生生物を少しでも増加させるという努力が必要とのお考えでした。浜田さんからは郷土愛の重要性をお話しいただきました。人の心が非常に大事だというご指摘でした。あるいは藺さんは、それを実行するための信念の重要性を主張されました。前田さんからは、じかに山を歩く研究が極めて重要だというご指摘があったと思います。花井さんの方からは行政面でもやるべき仕事がたくさんあるというご提案でした。

最初にご提案申し上げたように、早速フロアからのご意見をいただき話を進めたいと思います。

【消費者の立場から——廃棄物処理など】

(才田、フロア) 本日は貴重な発表を聞かせていただきまして、ありがとうございます。私は名瀬に住んでいますが、一住民、あるいは一消費者の立場で幾つかお尋ねしたいと思います。まず阿部先生の野生生物センターで作られた奄美のカルタは大変貴重なもので、東京の孫たちは非常によく活用しており、ありがたく思っております。その素晴らしいアイデアにあと1つ付け加えて、奄美の野鳥の鳴き声をCDにして発売する方法がないでしょうか。また、山の近くに住んでいる奄美の人は、鳥の鳴き声を聞く機会が多いので、そういう地域の人たちに、例えば巣箱を作るなど野鳥の保護で地元ができるものはないか、教えていただきたいと思っております。

それから浜田さんにお尋ねします。アマミ



ノクロウサギの「ノ」という字です。それはアマミノクロウサギという一つなぎになって、奄美大島にすんでいるクロウサギということ指しているのか、あるいは「アマミ」という言葉と「ウサギ」の間に入っているものなのか、あるいは「アマミ」と「野ウサギ」というふうにアマミ野ウサギなのか、そこを教えてくださいたいと思います。

それから藺さんには、最近の新聞でウミガメの奄美への上陸が非常に減っているということをお聞きしましたが、如何でしょうか。

さらにくわえますと、一消費者としてペットボトルや瓶などを回収していますが、回収した後それを置く場所がないということが大きな問題ではないかと思っております。また廃油のリサイクルは、回収業者が回っている事業所などだけで、一般家庭ではその後の対策がなく、せっかく溜めた廃油を流して処分するという結果になっています。それを行政として力を入れていただいて、例えばガソリンスタンドやアイアイ広場などのような場所に回収する受け皿をつくっていただきたい。そういう施設を名瀬市内、奄美市内に作ってもらえれば、あるいは鹿児島県として各地域にそういったものを配置してもらえればと思っております。特に奄美の場合はリサイクルのためのコストが高いから、事業として成り立っていない点もあります。やはり地元で出た廃棄物は地元で処理できるような方向を考えていただければ、事業者も消費者もうまくいくのではないかと思います。

(阿部) 本筋から少し離れてしまうようなので簡単に言いますが、やはりメジロやヒヨドリなどは、たぶんすぐに呼べるのかなと思いますけれども、ミカンなどでもぶら下げておけばつきに来るのかなという気はします。ただいろいろな種類がというほど、たくさんの種類は来ないかもしれません。

CDは奄美の野生生物の音声を収録して出版するという動きもあるようです。センターがすぐに作れるかどうかは分かりませんが、何年か前に来たフランス人も奄美の音のCDを出すとか、出したとか言っていたので、そのうち日本でも販売されるかもしれません。

【動物の鳴き声のCD】



(浜田) アマミノクロウサギは野クロウサギではないかと以前にも質問されたことがありましたが、ウサギはノウサギとアナウサギに分けら

れるようで、アマミノクロウサギはアナウサギの仲間、ノウサギではないそうです。アマミノクロウサギ、奄美にいるクロウサギだそうです。それからCDですけど、実は私のこの写真集の後ろに、奄美のいろいろな鳴き声を収録したCDが付いています。宣伝になっちゃいましたけど、もしよかったら買ってください(笑)。

【ウミガメが産卵できない】

(蘭) 先程は中途半端で終わっているの、少し付け加えてお答えしたいと思います。ウミガメのことですが、かれこれもう十数年前になりますか、奄美の海辺を守る会



のメンバーが集まって住民運動をやっている時期でした。大和村戸円のヒン浜に護岸堤を造るという計画があったときに反対の運動を起こしました。大島支庁は工事を中止しました。この浜でつい2~3日前、鹿児島地裁の弁護士の皆さんが来て検証して帰りました。砂浜が減って見るも無残な格好になっております。昔は浜一帯にウミガメが産卵をしていた浜です。去年は1匹上がって来たようですが、掘るしぐさをしたけど掘ることができずに、涙を流しながら海に戻っていったと、地元の女性がおっしゃっていました。亀が泣いた涙かということは別にして、本当にかわいそうにと、この方は陳述をしておりました。

砂浜がとにかく減っていております。砂浜で穴を掘らないとウミガメは産卵できません。この砂浜が減っているヒン浜の場合、その海岸から600から800m先の湾内で海砂を取っているんです。今年で25年目です。多かったときは1年で12万立方メートルで



す。12万立方メートルというのは、私は見当もつきませんが、皆さん方はどう思われますか。

海の砂が海岸の砂が減っていくのは間違いないと思っております。それから瀬戸内町の嘉徳の浜も、海砂採取と関係があると思っておりますが、大量の砂が海に流出しています。

コアジサシがずっとコロニーとして使っていた砂浜で、モクマオウが生えだしてだめになったところが土浜(笠利町)です。地元の高校やPTAの皆さん方と一緒に、広がっていった場所の20本近くを伐採したことがあります。そうしたら、そこにコアジサシは帰ってきました。

最後に一番言いたかったことを1つ。こちらが自然の権利訴訟を起こしてから、地元でも環境保全とか自然に優しくとか、奄美の自然を守ろうとかという声が出るようになりました。しかし実態を伴わないままに今日まできています。自然を大事にしようと言いつつ、破壊をし続けています。それが人間の生活にとって必要不可欠のものではなく、まさにお金を使うために、予算消化のためにそういう工事があちこちで続けられていることを強調しておきます。具体例は数がいっぱいありますから省略いたします。

それからもう1つ、自然遺産ということを考える場合、私は海まで含めて考えます。さらに奄美の自然環境がどれだけ価値のあるものか、貴重なものか、あるいは今までの生活のかかわりはどうだったか、どういう歴史をたどってきたか、これらをもう一度確かめない限り、私は自然遺産登録の実現というのは無理ではないかと思っています。

地元の自治体を中心になって、地元のみなが奄美の自然を大事にしていこう、そこにこんないい文化も生まれたという機運を盛り上げる、これが大きな勝負だと思います。遺産登録が実現するしないにかかわらず、この努力はぜひ続けていかなければいけない。遺産登録はその結果であって、それは目的ではないというのが私の考え方です。

【行政の立場から——クリーンセンター】

(田丸 奄美市環境対策課) ご発言にお答えします。話はペットボトルからプラスチックまで拡大しましたが、ペットボトルの方は今、資源ごみの回収ということで、毎月第1から第4の土曜日、色別瓶と一緒に回収しております。

プラスチックはペットボトルのラベルとかトレーとかいろいろな形で、特に最近では肉、魚はほとんどトレーに包まれて鹿児島から持ってきます。使った後の回収がないので、



今はクリーンセンターの方に運ばれて燃やしております。ごみの分別については、平成16年の11月から段ボール、そして今年の4月から古紙全般を取り掛かっているところです。こうした中、最後に残ったのはビニール系、プラスチック類をどうするかという問題は先程の才田さんのご指摘の通りだと思います。

行政ではどうしても財源不足に直面し、回収の頻度を減らすことを考えています。回収を月に1日増やすことによって1カ所当たり3万3,000円の経費が掛かるので、これらの予算をどうするか、また回収業者の数をどうするかで頭を痛め、プラスチック類については現在検討中です。

一方、クリーンセンターの開設から約10年経ちました。耐用年数が15年となっていますので、この施設をいかに延命していくかというのが、私たちの課題です。

今まで段ボールを燃やしていましたが、段ボールというのは熱量が高いんです。火力が800度以上になりますとダイオキシンも出なくなりますが、段ボールを燃やさなくなると、今はそれをプラスチックが補っているという状態です。鹿大の皆さん方とは連携を取ってやりますので、生ごみの堆肥化の問題とかも含めて、同じ立場で研究していただければと考えております。

(根建) ありがとうございます。具体的な話もいろいろ出てきました。鹿児島大学でも複数の学部からいろいろなアイデアが出て

いるところですよ。ところで、せっかくの機会ですから、今回のテーマ「持続可能な発展」あるいは「世界自然遺産」になるべく焦点を絞りたいと思います。

【世界自然遺産——市民は関心がないように見える】

(山田、フロア) 僕は奄美マングースバスターズとして、こちらの島で働いています。



どなたにお聞きすれば分からないのですが、世界自然遺産に向けて一般市民の声とかを吸い上げていきたいといった話で、具体的にどういうふうにして一般の人、例えば環境に興味がないような人から、世界自然遺産について意見を吸い上げていくのかなと思ったんです。僕などは世界自然遺産や環境のことを知りたいと思って、こういう場に出てきたりしますが、あまり関心のない一般の方々がどういうふうに思っているのか、どういうふうにして意見を吸い上げるのかと思って質問します。

(花井) 一番難しい話です。何回、世界自然遺産の会をやっても、集まる方はだいたい150名なんです。顔ぶれもほとんど似ていて繰り返しです。ですから先程、私が3つのシンポジウムに皆が行くようにしようというのは、そこなのです。150名から1万人規模のシンポジウムになるときが、世界遺産になる時だと私は思っています。そこに行く手だけ

というのは大変難しいんですけども、これを不断に努力していくしかないと思います。私達も非常に苦労しています。

【語り合うこと、時間がかかる】

(蘭) 今、大変大事な質問で、また実際にやるとなると、大変難しいなと思いながら聞きました。私ならという言い方になりますが、世界遺産に登録の話が出ていないという以前に、奄美の自然はこんなに貴重なんだよ、こんな意味があるんだよ、こういう独自性があるんだよ、ということと語っていく。そういう豊かな内容があるから世界遺産に登録という話も出てきているという形で進めていくことになると思いますが、大変時間がかかると思っております。

地元では関心が低いように見えます。鹿大の『奄美ニューズレター』の27号で、そのことを触れているので、きちんと奄美の現状を見ておられるなと思って読みました。まず行政職員の皆さんが学習会、勉強会をやっていただけないでしょうか。

横浜から来たある自治体の人を案内して島内の役場にお邪魔したときのことです。役場の人が奄美の自然をあまりにも知らないで、「こんな状態ですか」とあきれていました。私も恥ずかしい思いをしました。環境保全審議会が奄美市にできたことに期待しております。メンバーを見ても大変詳しい方々が加わっているようです。しかも天然記念物とか絶滅危惧種にとどまらず生息エリアを含めていることに注目したいと思います。

それから皆さんはあまりご存じないかもしれませんが、小中高校で、奄美の環境問題についての学習が広がっています。系統的とか総合的にはなっていないようですが、大いに期待したいと思います。

(根建) どうもありがとうございました。これからもうまく発展していく道が見つかる

ことを強く希望します。

【記憶と違う奄美の風景—ボランティアの力】

(守屋、フロア) 私は10年ちょっと前に43年ぶりにUターンして、今、蘇刈という瀬戸内町の小さな集落に住んでいます。

Uターンして、まず気付いたことが3つありました。1つは先程来出ているコンクリートで固められて海と陸が遮断されていることです。川は三面張りになって陸と川が遮断されている。それからもう1つ、昔はシイの木の間だったのに、今は松の木山になってしまっている。3つ目はふもとは集落ごとに必ずわき水があったはずですが、そのわき水がなくなっている。この3つが自分の子供時代に記憶していた奄美の風景との大きな違いです。



Uターン後10年たった今、蘇刈の護岸は完全にアダン林で覆われていて海からはまったく護岸は見えません。10年かけて住民がこつこつと挿し木をして、立派なアダン林が戻ってきております。おかげさまで砂浜がたくさん広がり、水際生物が増え、それから海藻は戻り、浅瀬には小魚が戻ってきています。もう1つは大きな台風のために集落を砂が埋め尽くすとか、畑には真っ白になるくらい塩害が起きていましたが、今はそれもまったく起きなくなっています。

護岸工事は1年間でできますけれども、環境保護のアダン林は10年以上かけて住民が

ボランティアでこつこつと挿し木した成果です。私も鹿児島大学のOBなんですけれども、この持続可能な体制を作るには、1年、2年ではだめです。やはり住民の自発的なボランティア活動が基礎にあって、10年、20年と息長く我々の奄美を守る行動を続けていかないと、遺産登録の取り組みも線香花火に終わるのではないかというふうに思います。

(阿部) 本当に蘇刈の方々に敬服します。仰るように島に帰ってきて感じたことや今までの10年間で、蘇刈以外の皆さんにもぜひ語っていただきたいし、これからも島に住む多くの方々に語っていただきたい。とても大切な内容だと思いました。これからもよろしく願いいたします。

【護岸をアダンで埋めよう】

(守屋、フロア) おっしゃる通りで、私は瀬戸内町のボランティア団体の五十人委員会の会長もしているんで。この五十人委員会で考えたことは、100年かかって瀬戸内町の護岸をアダンで埋めようとみんなで決議したことがあります。蘇刈を基点にして、瀬戸内町全部の護岸をアダンで埋めようと。これはもう住民がこつこつこつこつと挿し木していくしかないのです。

(根建) ありがとうございます。本質的な話になってきました。ほかにご意見はないでしょうか。

【野生化したヤギの問題も】

(西、フロア) 奄美大島にIターンして、まだ1年半くらいの新参加者です。私もマングースバスターズでして、日頃、山の中を歩いています。世界遺産登録に向けて自然の生態系にとって脅威なのは、マングースや犬、猫はもちろんですが、どう見ても多いのは野生化したヤギです。



かなり山奥でも重機が入り込んでくるように、木がバキバキ倒れる音がします。ヤギの群れです。奄美の生態系の中にヤギが入った場合に、植物相に悪い影響を与えるのはもちろん、野犬の餌にもなります。今、奄美の生態系の中でヤギがいなければ、野犬はたいがい餓死するのではないかと個人的に思っているんです。ヤギが多いと犬も増えてしまう。世界遺産どころではないと考えています。

もう1つは、去年引っ越ししてきた次の日に小湊の湿地でゲンゴロウでも探してみようかと思って、たも網を入れたらアメリカザリガニがたくさん入りましてがっかりしました。ザリガニも非常に繁殖力が旺盛で、淡水の生態系に悪影響を及ぼす生物です。

ザリガニや野犬、野生ヤギのことについてのどのように思われるか、日頃からフィールドワークをされている前田先生にお聞きしたいと思います。

【駆除が必要である】

(前田) ヤギは当然、自然遺産登録に関係します。数年前ですが、小笠原の方では自然遺産登録がうまくいきそうだという段階から、ヤギについては徹底的に駆除しています。先程も何度か出た話と関係しますが、人家が非常に近いので、小笠原のように猟友会が入って害獣駆除という形を取りにくい場所が多いのです。ヤギというものなかなか賢くて、わなとかネットでは捕まらないので、非常に経費がいるだろうと思います。

それともう1つは、我々は野生化したヤギと思っているけども、実際に殺してしまうと持ち主が現われて、俺のヤギをどうしてくれると文句が出ることも多々あります。私のところにもヤギの集団がいて、畑のものは勝手に食べる、お墓の花も全部食べてしまう。だからお墓に生花を供えられないので、最近はお墓に生花を供えているということもあるんです。

行政にもいろいろな方が陳情がいくんですが、結局、皆たらい回しなんです。財産権が絡むので当事者で話をしてくれとか、あるいは考えておきますということです。実際は差し迫った問題で、生態系の破壊だけでなく、防災上の問題もあるんです。ご存じかと思いますが、西古見の灯台のところではヤギが植生をはいでしまったので、四六時中崩落が起こります。崩落してコンクリートの構造物などが崩れたりするので、メンテナンスに行くのも命の危険があるというような状況です。何度も修理していますが、よく壊れています。



野良ヤギのもとの所有者にも入ってもらい、きちんと行政や地域の住民の間で話し合いをして、駆除するものは駆除すべきだと思います。勝手にその辺に放して繁殖した子供だけを取ってくるやり方を認めないでほしいと思っています。

放牧といいますけど、放牧というのは管理される中での話であって、まったく放り出したものは放牧でも何でもありません。ただの捨てヤギなのです。本当はどうにかしてほしいと思っています。

ザリガニについては、僕もあまり認識がなかったのです。瀬戸内に水田が消え、見たこ

ともなかったからです。この前、結構いると聞いてびっくりしたぐらいです。生態系に対する影響が大きいのですが、これを知ったときザリガニでも生きられる環境が残っていてよかったなとも思ったぐらいです。内地ですでにザリガニすら生きていけないところがいっぱいあるのです。

いずれにせよ、ザリガニはほかにわずかに残っている生態系に対していろいろな影響もあると思います。環境省かどこかで出した規制法に則って、ここでも早く駆除できたらいいなと思っています。

【外来種関係、ヤギから植物関係——環境ネットワーク奄美から提案をしたい】

(蘭) 私は小学校のころ、おやじから押し付けられてヤギを数匹飼っていました。牛を1頭飼うよりも難儀だと思いました。

学校から帰れば草さばくりでうんざりしておりましたが、以前はヤギを今のように放し飼いするのは、まったく考えられないことでした。どこかのヤギが1匹逃げていったときには、隣近所が皆、集まってきて、それを捕まえて、また縄でくくるのです。畑の野菜から何から食い散らすからです。

いつごろからか、あちこちで山に白いものが見えるなと思ったらヤギです。何箇所かの場所を見て歩いていますが、もうあちこちに見られます。

地元新聞が
いっぺんヤギの
ことを書きました。また、2~3
日前に名瀬の海上保安部から灯台のところが大変うんぬんという、今、前田さん



さんがおっしゃったようなことについて説明があって本当にほっとしました。環境ネット

ワーク奄美は、ちょうど2~3カ月前から提案書という形で、外来種関係、植物関係、生き物関係、それから野良犬、野良猫、これらにヤギも含めて何とかしなければいけないと、まとめました。こうした方がいいと言えない部分が大変ややこしいんです。

いままで2回ぐらい検討して、関係自治体、大島支庁、あるいは環境省まで含めて相談をしながら、環境保全のために自分たちができることは何かを、考えていきたいと思っています。

(阿部) ヤギはまずは持ち主がいらっしゃるんだったら、その持ち主が自分の土地に全部戻して、そこで飼うように指導する。それができないであれば、もう野ヤギということにしかならないと思うんです。きちんと責任を持って自分の土地まで戻してくださるよう要求する必要があるのだらうと思います。

(蘭) もう一つ付け加えますが、西古見の先の野生化したヤギの駆除を海上保安部が申し入れています。こちらでも島内全域を含めて取り組んでいます。

(根建) どうもありがとうございました。世界自然遺産と持続可能な発展を念頭において進めてきましたが、現地ならではのご意見やご質問を多数出していただき、貴重な情報交換の場になりました。他にもいろいろお聞きしたいことがありましたが、もう時間になりました。

本日は皆さん、そしてパネラーの皆さん、熱心に討論に参加していただきましてありがとうございました。心からお礼を申し上げます。(拍手)